

## 南方熊楠の海外での活動に関する資料の収集と分析

松居 竜五\*<sup>1</sup>

### Collecting and analyzing of the oversea materials concerning the activities of Minakata Kumagusu

Ryugo Matsui\*<sup>1</sup>

Minakata Kumagusu (1867-1941) stayed in US and UK between 19 and 33 years old, and left a certain amount of materials left not only in Japan but abroad. The author has been discovering and analyzing such oversea materials of Kumagusu, while researching his archives preserved in his former residence and other places in Japan. During this project, several important materials of both primary and secondary source were successfully found. This paper introduces these new materials, explaining how they shed new lights on the life and studies of Minakata Kumagusu in the following order. 1. Kumagusu's oversea income and the change of the rate between Yen and GBP. 2. Articles concerning Kumagusu in the Manchester Times. 3. On the presentation by Kumagusu in the British Association in 1898, which was perhaps arranged by Charles H. Read. 4. Kumagusu's notes in his own paper, "Footprints of Gods, etc."

南方熊楠（1867-1941）の伝記的事実に関する研究は、ここ20年ほどで大きな成果を収めてきた。その背景としては、1992年から始められた南方熊楠資料研究会による和歌山県田辺市の邸内調査の結果、熊楠の残した資料が分類・カタログ化され、全貌が概観できるようになってきたことが挙げられる<sup>1)</sup>。こうした資料は、2005年に旧邸開館した南方熊楠顕彰館を中心として、研究的なアクセスが可能な方向でさらに整備されつつある。

その一方で、これと呼応して顕彰館以外の資料についても、調査が進行しつつある。顕彰館よりも古くから熊楠の資料の保存と公開に関わってきた和歌山県白浜町の南方熊楠記念館でも調査がおこなわれ、その成果が公開された<sup>2)</sup>。また、京都の高山寺から大量の土宜法龍苑南方熊楠書簡が2004年に発見されるなど、これまでの熊楠資料の所在からは予想外の場所で新発掘された資料も数多い。

こうした中で、海外に残された南方熊楠の関連資料について、筆者は1990年代から、ロンドン、サンフランシスコ、ランシング、アナーバーでの調査をおこなってきた<sup>3)</sup>。これによって海外でも日本国内の資料と呼応するような発見があり、熊楠の伝記的な事実の確定の一翼を担ってきたと考えている。今回、国際社会文化研究所の共同研究「南方熊楠の海外での活動に関する資料の収集と分析」（2008年度～2009年度）により、主に熊楠の英文関連資料の収集をおこない、一定の成果を挙げることができた。こうした資料を活用することにより、南方熊楠に関する従来の伝記的研究では理解できなかった側面が、さらに明らかになりつつあると考えられる。

\*1 龍谷大学国際文化学部

この論考では、そうした新しい海外資料を紹介し、それによって熊楠の伝記的な面で修正されるべき部分に関して指摘したいと思う。特に、ロンドン時代の熊楠の動向について、いくつかのトピックごとにまとめて報告する。

## 1 円・ポンドのレート変更と熊楠のロンドン生活

南方熊楠の海外生活を支えたのは、富裕な実家からの仕送りであった。熊楠の父弥兵衛は金物屋から一代で身を起し、酒造業で大きな成功を収めた。その後、長男の藤吉が家督を継いで弥兵衛と名乗ったものの、放蕩から身を持ち崩し、海外で学究生活を送る熊楠に代わって三男の常楠が一族の長となった。

熊楠への仕送りもまた、1892年の父の死後は常楠によっておこなわれることになった。しかし、1898年12月21日付けの手紙で、常楠はこれ以上、兄の熊楠に仕送りができないことを通告することになる。この書簡は武内善信により発見・翻刻されたものであるが<sup>4)</sup>、海外の熊楠に対する実家からの仕送りの実態は、これによって相当にはっきりしたことがわかるようになった。この書簡では、1889年から1900年までの、実家から熊楠への送金額が記されているからである。その経緯について、同書簡を元に表にしてみると以下のようなになる。

サンフランシスコ・ランシング滞在期

1886-1888年, 3012円74銭

アナーバー滞在期

1889年1060円60銭/1890年1090円90銭/1891年1190円/1892年688円

ロンドン滞在期

1893年1067円26銭/1894年1090円/1895年1520円/1896年1310円/1897年900円/1898年919円

総計

10785円91銭

これを見ると、海外での熊楠が受け取っていた仕送りは、基本は年間1000円強であったことがわかる。1892年にいったんかなり落ち込んでいるが、これは父弥兵衛の死と関係があるかもしれない。また、1895年と1896年にかなり増額された後、1897年からは900円程度に減額されているのだが、この時期は熊楠の学問が軌道に乗り、大英博物館に日々通い始めた頃にあたっている。これらの増額と減額に際しては、熊楠と常楠の間でなんらかの了解があったものと思われるが、これに関してもさらに詳しい検討が必要なところであろう。

熊楠の日記に書かれた支出入は断片的なものであり、こうした仕送りに関する全貌はわかりにくい。しかし、たとえば1889年2月2日の条には「石川楠一氏より、昨冬十二月廿七日附を以父書状及為替証書正金百八十七弗を書留にて送らる。今日受取」とあって参考になる。187ドルは当時のレートで約252円に相当するから、この年の全額のほぼ正確に1/4の額である。ということは、この頃は年間四回（おそらく12月末、3月末、6月末、9月末）に分けて、実家からの送金がおこなわれていたのではないかと推測できる。

前述の常楠からの1898年12月付け書簡では、この時までの仕送りの総計により、熊楠が父弥兵衛

からの遺産と学資を使い果たしたことが述べられている。この手紙は、仕送りの停止の通告が主旨であり、熊楠はこれを受けて懊悩した。その後、二年間なんとか常楠からの仕送りを引き出して、滞在期間を延長したものの、結局ロンドンでの収入の方策も尽き、1900年9月に帰国を余儀なくされることになったのである。

この間、弥兵衛と常楠がアメリカ、そして英国に送り続けた年間1000円という額は、当時の日本では大金であったが、ロンドンでは物価高により、一年間の生活費としてはギリギリのものであった。当時の英国通貨の単位は少々複雑で、1ポンドが20シリング、1シリングが12ペンスであった。つまり、熊楠への仕送りを一番少なかった900円の年で計算すると、一年に90ポンド、一と月に7.5ポンド(=150シリング)、一週間に34.6シリング、一日に5シリング(60ペンス)弱ということになる。

武内善信は、熊楠の下宿代がひと月24シリングつまり12円であるのに対して、当時の東京の一戸建ての家賃が75銭であることを挙げて、いかに物価の差が激しかったかを実証している。熊楠自身もまた、1シリングの価値について「日本の50銭、当地の12銭ばかり」という表現で、ロンドンの物価が日本の4倍くらいの感覚であることを記している。結局、熊楠が実家から仕送りしてもらっていた年平均1148円、つまりひと月10ポンド弱という額は、ロンドンで生きていく上で最低に近い収入であった。

熊楠はロンドン時代の後期には、一時期ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館で一日1ギニー(=1ポンド1シリング)の非常勤職を得ているが、実際に働いたのは確認できるかぎりでは13日間に過ぎない<sup>5)</sup>。また、翻訳などの見返りとして英国人の友人から謝礼を得ていたようだが、多くても一度に十数ポンド程度であったようだ。これらの副収入の額は、多少の足しにはなっても、生活を向上させるほどのものではなかったであろう。こうした事情から、武内は「熊楠がイギリスに着いて生活に困ようになったのは、父の死後送金が少なくなったからではなく、ロンドンの物価高が原因だったのである」<sup>6)</sup>と結論している。

この結論自体にはまったく異論はないのだが、実はもう一つ考えなければならない要素が生じてくる。それは、円とポンドのレートの変遷の問題である。つまり1878年頃から1892年までの円・ポンド換算レートは、ほぼ1円が3シリングの水準で推移しているのだが、熊楠がロンドンに到着した1892年末に切り下げがおこなわれ、1円が2シリングの水準になっているのである<sup>7)</sup>。現に最初のころの熊楠の日記によると、1円=3シリングの割合で交換されている<sup>8)</sup>のだが、それがある時期から1円=2シリングになっている。この時期の円は他の主要通貨との間でもレートを下げており、たとえば米ドルに対しても1892年から1893年にかけて、100円=70ドル台から50ドル台、さらには40ドル台に下がっている。

このレートの変更は、熊楠の当時の日記からもある程度は確認できる。1892年12月17日には、「常楠より書留着。金百五十円(二十一磅八志二片)正金銀行証封入」とあり、これは1円=2.854シリング、1893年7月14日には「常楠より状来り九十円(十二磅一志十一片)」とあり、これは1円=2.88シリングの計算になる。その後、1898年の常熊宛書簡には「一日一ギニー(日本の二十一円斗り)」とあり、1円=1シリング、また別の箇所では「一志(日本の五十銭、当地の十二銭斗り)」とあり、1円=2シリングの割合である。つまり、通貨の切り下げに伴って、熊楠が実際に交換する際にも、ロンドン滞在記の初期には3シリングであった1円は、後期には2シリングに値

下がりしていることが確かめられる。

このことは、ロンドン生活開始時の熊楠にとっては大きな衝撃であったにちがいない。実家からの仕送りに頼って暮らしている熊楠にとっては、物価が軒並み1.5倍になったようなものである。熊楠はロンドン時代の初期に、しきりに倹約の必要性を日記に書いているが、その背景には円安による生活の予想以上の窮乏という問題があったのである。

実は、日本政府はこの時期、金本位制の導入を模索しており、この切り下げは円の価値を実情に近づけることにあった。金本位制自体は1895年の日清戦争勝利による賠償金によって実現されるわけだが、熊楠は海外生活者としてこうした動きのとばっちりを受けたことになる。このように、1892年前後に起きた外国為替市場における円の切り下げにより、熊楠の海外生活の支出面での目算が外れ、生活計画を変えざるを得なかったという点は、見のがされてはならないだろう。

## 2 『マンチェスター・タイムズ』誌における南方熊楠報道

1892年9月に始まる南方熊楠のロンドンでの学問生活の転機となったのが、翌年10月5日付けの『ネイチャー』に掲載された処女論文の「東洋の星座」The Constellations of the Far Eastであったことはよく知られている。19歳からアメリカで独学による学問研鑽を積んできたとはいえ、26歳でこの世界屈指の科学雑誌に論考を発表できたことは、熊楠にとってまことに幸運であったと言える。熊楠自身、後年の「履歴書」の中での述懐で、次のように当時のことを劇的に描き出している。

その時ちょうど、『ネーチャール』（御承知通り英国で第一の週間科学雑誌）に天文学上の問題を出せし者ありしが、誰も答うるものなかりしを小生一見して。……編輯人に送りしに、たちまち『ネーチャール』に掲載されて、『タイムズ』以下諸新紙に批評出で大いに名を挙げ、……<sup>9)</sup>

まるで「一朝目覚むればわが名天下に高し」と歌った英国の詩人バイロンを彷彿とさせる大成功である。この記述が有名なために、一般向けの伝記などでは、熊楠のデビュー作の評価が『タイムズ』などに掲載されたことが、かならず喧伝されている。しかし、実はこのことは、これまで事実としては確認されていなかった。自己の経歴を語る熊楠の手法は多少芝居があったところがあるため、この逸話もある程度の誇張を伴うものではないかという類推もなされてきた。

今回、Times Archive および大英図書館の新聞データベースを検索してみたが、この前後の英国の新聞に「東洋の星座」を紹介する記事を見つけることは、やはりできなかった。しかし、その代わりに、おそらくこの述懐と深い関わりを持つと思われる記事について、重要な発見をすることができた。『マンチェスター・タイムズ』1893年10月20日金曜日号の“Farm and Field”欄に掲載された「動物の保護色と中国人博物学者」という記事で、熊楠の『ネイチャー』誌での活躍について、次のように紹介したものである。

動物の保護色などに関するダーウィンの説が、千年も前の中国人によって完全に理解され、記述されていたなどということを知るのは、何たる驚きだろうか！このほどケンジントンのブ

リスフィールド15番地に住む南方熊楠は、『ネイチャー』誌にたいへん興味深い記事を送った。それによると、次の文章は「博覧強記の人物」である中国の段成式の商品からの引用であり、なんと西暦890年に書かれたものだというのである。「一般に鳥や獣は、自分の姿や影を隠そうとして、さまざまな対象に同化する。そのため、蛇の色は地面に似ているし、茅の中にいる兎はうっかり見逃してしまいやすい。また、鷹は樹木と同じ色をしているものである」。**【資料1-1】**

この記事が、1893年10月12日付けの『ネイチャー』に掲載された熊楠の英文論文第二作、“Early Chinese Observations on Colour Adaptions”を指していることは明らかである。この第二作は、最初の「東洋の星座」のわずか一週間後の次号に掲載されており、熊楠の『ネイチャー』での名声を確立する一翼を担ったと考えられる。内容的にも、「小生はそのころ、たびたび『ネーチュール』に投書致し、東洋にも（西人一汎の思うところに話して、近古までは欧州に恥じざる科学が、今日より見れば幼稚未熟ながらも）ありたることを西人に知らしむることに勧めたり」<sup>10)</sup> という主旨を非常に全面に押し出したものであった。

このような事情から、「履歴書」に書かれた「『タイムズ』以下諸新紙に批評出で大いに名を挙げ」については、現時点では、この記事を指していると考えるのが自然ではないかと私は考えている。もちろん、同じ『タイムズ』とは言っても、しばしば「ロンドン・タイムズ」と呼ばれる1785年創刊の世界最古の一級紙で現在まで続いているあの「タイムズ」ではなく、『マンチェスター・タイムズ』は工業都市のマンチェスターを中心とするイングランド北西部に流通していた地方紙である。こちらの方は、1828年に創刊され、熊楠が英国を去る1900年に廃刊となった週刊の新聞であった。それでも、この記事の扱いは日本人学者としては異例の成功と言えるもので、熊楠が日本人向けの文章の中で、多少色を付けて「タイムズ」と呼んでいたとしても、それほど責められるものではないだろう。

熊楠が「履歴書」の中に書いている「タイムズ以下」の「諸新紙」については、今回の調査では確かめられず、今後さらに発見される可能性は残されている。「拇印考」「さまよえるユダヤ人」「マンドレイク」などはしばしば他の雑誌に転載されたり紹介されたりしていることが確認されているので、熊楠はそのあたりも含めて「大いに名を挙げ」としているとも考えられるところである。

さて、『マンチェスター・タイムズ』上の熊楠関連の記事は、この他にも二件ある。一つは1896年11月2日号の「科学短報」欄に載った以下のような内容のものである。

『ネイチャー』誌の通信欄は、つねに活発な議論の陳列所の役割を果たしている。南方熊楠氏による中国の謎もあれば、世界のさまざまな地域からの驚くべき記録もある。後者の中には、放射線技師が「レントゲン機器を数ヶ月操作した結果として、指の爪がほとんどなくなり、片方の手の皮が三度もむけてしまったという。…」**【資料1-2】**

ここでは熊楠の論文の紹介と言うよりは、『ネイチャー』の誌面が好奇心をそそるものであることを示す例として、名前が挙げられている。しかし、だからこそ、この時期の熊楠の同誌での活躍が特筆すべきものであったことを傍証していると言えるだろう。

『マンチェスター・タイムズ』の熊楠関連の記事はもう一つある。この三番目の記事は、1900年

12月28日号に掲載されたものである。熊楠は同じ年の9月1日にロンドンを立ち、12月にはすでに和歌山の実家近くの理智院に居住していた。そうした意味で、この記事はロンドン時代のまさに最後の学問的足跡と言えるものであろう。実は『マンチェスター・タイムズ』自体もこの号が廃刊前の最後の号で七十二年の歴史に幕を閉じているという因縁付きのものである。

記事の題は「不死の人々」で、「伝説——空飛ぶオランダ人とさまよえるユダヤ人」「故クラレンス公爵」「不思議な体験」の三つの小見出しからなっている。熊楠の紹介があるのは、三番目の見出しの後半、全体の文章の最後の部分である。

日本の学者が最近、[さまよえるユダヤ人に関する]ヨーロッパの昔話と古代インドの仏教説話の間にはっきりとした類似があることを発表した。もちろん異なる点も少なくないのだが、あまりによく似ていることに驚かされる。この南方熊楠氏という学者はまた、中国の伝説にはインドの仏教説話よりもさらにヨーロッパの話に似たものがあることを明らかにしている。膨大な文献を駆使した不思議な、そして興味深い題材である。【資料1-3】

この記事においては、熊楠の『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌掲載論文である「さまよえるユダヤ人」(1899)が取り上げられている。これはロンドンで発表された熊楠の英文論文の中でもっとも長文のものの一つであり、比較説話学に関する代表作と言ってよい。記事の全体の流れは、「空飛ぶオランダ人」や「さまよえるユダヤ人」のような不死の人の伝説についておもしろおかしく取り上げたものであるが、その中で東洋の説話との類似点を説いた熊楠の論文を一種の権威として持ち上げている観がある。

このように見てくると、最初期の英文論文から熊楠に注目してきた『マンチェスター・タイムズ』紙は、最後までこの東洋人の若い学者の仕事をフォローしていたことがわかる。ただし、同紙がこれほど熊楠に入れ込んでいた理由は、現在のところは不明である。政治的には、『マンチェスター・タイムズ』はリベラルな主張を繰り返しているから、このことが外国人の英国での活躍を応援しようという態度につながっているのかもしれない。

以上のように、今回の調査からは熊楠と『マンチェスター・タイムズ』の関わりがある程度わかってきたのだが、まだ不明な部分も多い。その一つが1898年9月27日の日記に書かれた「リード氏と館の入口にあふ。予の論文、タイムスに出し由」という記述である。ここで熊楠が言う「予の論文」にあたる記事は、今回、この時期の『ロンドン・タイムズ』、『マンチェスター・タイムズ』のいずれからも発見することができなかった。これは他のタイムズを名乗る新聞のことかもしれないし、また熊楠が英国での新聞一般のことをタイムズと呼んでいるという可能性も捨てきれない。そうすると、処女作の「東洋の星座」を紹介した「タイムズ」も、将来発掘される可能性は依然として残っているということになるだろう。

### 3 「日本のタブーシステム」の発表と紹介者のチャールズ・リードについて

熊楠は1898年にブリストルで開かれた第68回の英国科学振興協会において、「日本におけるタブー体系」と題する論文を代読で発表している。この論文の本体は未発見であるが、南方熊楠顕彰館には2種類の草稿（[原稿0055] [原稿0056]）が残されており、筆者は2005年に邦訳を公刊した<sup>8)</sup>。

この論文は、内容的にも後の神社合祀反対運動との関連が指摘されていて興味深いもの<sup>9)</sup>であるとともに、熊楠の英国の学会における唯一の正式な成果発表であり、ロンドンの学界との関わりを考える上でも重要なものであったと言える。

この発表に関しては、この時に紹介したもの以外にも、いくつかの資料が残されている。その一つは当時の日記である。それによれば、熊楠は1898年9月4日に「予は論文しまひ、之をプリストルにおくる」、9月7日には「プリストルの会書記 Myrel 氏より状一受」とあり、この頃やりとりがおこなわれたことがわかる。しかし、その後の9月20日にも「日本タブー論を草す」という記述があり、9月4日に送られたものは要旨であったか、それともさらにその後書き直されたのかどちらかということになるだろう。

一方、9月8日の条には「夜リード氏へ状一出す。プリストルえ出会断る也」とあり、ここからは二つのことがわかる。一つは、熊楠の英国科学協会への発表を橋渡ししたのが大英博物館のリードであったらしいこと。そしてもう一つは、この時期までリードは、熊楠本人がプリストルに赴いて、自分で口頭発表すると考えていたらしいことである。

チャールズ・ハーチュレス・リード (Charles Hercules Read) は、大英博物館の有力な館員で、人類学者としても有名な人物である。熊楠とは、1893年9月に前任者のウォラストン・フランスク (Wollaston Augustus Franks) と一緒に大英博物館の官舎で出会って以来の仲であった。フランクスが1895年に胃ガンのために亡くなってからは、熊楠の博物館での後見人のような立場を取ってきた。1895年4月に熊楠が大英博物館閲覧室の利用許可を受けた際にも、紹介者として申請書に署名している。リードから熊楠への手紙は南方熊楠顕彰館に五通（他に封筒のみ一通）残されており、今回参考のために、これらをすべて翻刻した。

簡単に解説すると、【資料2-1】は1895年3月22日付けで、自分が引っ越したばかりであり、熊楠を新居に招きたいが、片岡「提督」とは別の日がいと書いている。この片岡とは、熊楠をフランクスに紹介した美術商の片岡政之のことであるが、実は彼は詐欺師であり、後に日本で逮捕されて実刑判決を受けている<sup>10)</sup>。熊楠は1897年11月30日の日記に「朝田島氏より状一着、片岡政行捕縛の時事新報おくる。直に略を訳してリード氏に送致す」と記している。もちろん、この当時はそうした片岡の素性については明らかではなかっただろう。熊楠がリードに会おうとしたのは、時期から考えて大英博物館閲覧室への紹介の依頼であったかと思われる。この手紙ではまた、土宜法龍から熊楠宛の書簡が大英博物館付けで送られていることや、熊楠の大英博物館への袈裟の寄贈のことが書かれていて、当時彼が置かれていた状況がよくわかる。

1897年12月4日付けの【資料2-2】は、故フランクスの肉筆を額に飾るために送るというもので、熊楠の恩人への追悼の意が読み取れる。1898年11月16日付けの【資料2-3】は、面会時間の連絡で、この前年にロンドンを訪れていた徳川頼倫のことが言及されている。1898年5月16日付けの【資料2-4】は熊楠宛ではなく、熊楠を高名な民俗学者のゴムに紹介する手紙で、いくつかの重要な要素を含むものとしてすでに何度か筆者は断片的に紹介してきた。1899年4月16日付けの【資料2-5】は、徳川頼倫からプレゼントとして絹の巻物を受け取ったことと、丹山に関する質問が一件という内容である。

徳川頼倫からのプレゼントの一件については、熊楠はリードに紹介して宿所を探すなどの世話をしたものの、帰国後に音沙汰がなかったとして不満の種になったようである。たぶんに露悪的な態

度で書かれた公使館宛の戯文、通称「ロンドン私記」では「紀州侯の餓鬼頼倫、三年前に博物館長に物もらひ、帰国の上礼品送るとて、三年立つに送らず」と強烈に毒突いている。さらに、リードの来簡からは読み取れない要素であるが、熊楠はリード本人に対しても、英国協会での発表の際の待遇に関して、ある時期、不満を募らせていたことが、次の「ロンドン私記」の文章などからは伺うことができる。文中の「館長」が誰か特定されていないが、当時、大英博物館の博物館部門のもっとも大きな部署のキーパー（部長）であったリードのことと考えてまちがいないだろう。

唯々小生のみか国家の面目にも関するといふは、当地で博物館の長もする人に物もらひ、礼物すべしといひながら、今にせぬはなにか小生中途で盗んだ様に思はるゝも如何にて、昨夏「ブリチシュ・アソシエーション」の人類学部の講説は、小生開館第一に説くつもりなりしも、右の事をあまりに館長が尋るから、小生苦笑して、人に物遣るに礼物を期するといふことありや、と一本いひ込めしより、忽ち色変わり、小生の講説は第三番にまわし、米人の次にせしなり。加様に執念深き館長故、今に恨めしく思ひ居るも知れぬから、小生へ世子よりの名前にて、閣下中井氏よりなにか送りては如何と、又一本やられ、遂に止を得ず、なにか館長へ送りし由。<sup>14)</sup>

この時期の熊楠は精神的にかなり荒れた状態にあったため、「ロンドン私記」の文章は全体的に偏執的な傾向があり、この部分の記述もかなり差し引いて考えなければならぬだろう。しかし、1897年の5～6月にロンドンを訪れた徳川頼倫の贈り物の一件が、1898年9月の英国科学協会での発表に差し障ったことを、1899年8月に「ロンドン私記」で書いているという事態の経緯については、いちおうつじつまが合っている。ただし、1912年に書かれた「神社合祀反対意見」においては、「明治三十年夏、ブリストル開催の大英科学奨励会にて、人類学部長の演説に次いで、予が読みたる「日本齋忌論」<sup>15)</sup>とあり、ここでは自分の順番が一場面であったことを誇っている。

しかし、この大会後に刊行された報告書によれば、実際には熊楠の順番は「フォークロアおよび比較説話学」の部の7本の論文の中の7番目、したがって一番最後に読まれたというのが事実であるようだ【資料3-1】。本人不在の代読論文であるから、最後に回されたのも致し方のないところであろう。いずれにせよ、発表が確実になされていることは、この大会の報告書の中で、書記のマイレルが書き残している梗概から明らかである。以下はこのマイレルによる梗概の日本語訳である。

南方熊楠による「古代、中世、近代における日本のタブー」は日本の三つの時代におけるタブーの慣例について論じている。原初から七〇年までの第一期には、固有の複雑なタブー体系が大きな影響を齎した。天皇、貴族、僧侶、寺院や、ある種の動植物、それに不浄の事物など、実体や名前がタブーとして扱われた。暗黒の地下世界にまでこの体系は及んでいて、そこではこの世の植物はタブーとされていた。あたかも地獄のかまどで煮炊きされた食べ物を口にってしまった死霊のように。

西暦七〇年から一八六七の明治維新にいたる第二期には、この固有の体系は、中国とインドの文化とともにもたらされた信仰によってほぼ覆い隠され、全体として緩和されることになった。仏教の超意識心理学の理論とともに、多くの新しい禁忌がもたらされた。

西暦一八六七年以降の第三期には、雑種的で錯綜したタブー体系は公的には廃止された。しかし同時に、近親者の死に関する多くの原始的な神道のタブーは復活した。

著者は、日本の芸術や文学に表された献身的で深遠な性質や歴史的なできごとは、タブー体系に多くを因っているとす。【資料3-2】

この梗概の内容は、すでに日本語訳を刊行した草稿二種とはほぼ一致するものである。ただし、発表の正式な題が「古代、中世、近代における日本のタブー」(On Tabu in Japan in Ancient, Mediaeval, and Modern Times)であったことなど、いくつか興味深い点はある。熊楠がなぜみずから口頭発表をせず代読にしたのかなど、未解決の謎は多く残るが、ロンドン時代の熊楠の学問的関心を考える上で重要なできごととして、今後も調査・研究を続ける必要がある論文である。

#### 4 「神跡考」への書き込み

南方熊楠顕彰館所蔵の旧熊楠蔵書の中には、多くの書き込みが看られるものがある。その中で、自分が発表した論文に書き加えているものは、一種の校正として考えられるべき面を有している。今回、熊楠の英文での主著の一つである「神跡考」について、熊楠所蔵本(顕彰館資料[洋雑誌034] Notes and Queries)への書き込みを翻刻したので、報告しておきたい。

チブチャス人たちの間では、チミザバグアは東から来た神の使いであるとされている。彼は諸法典、さらに紡績・織布技術の生みの親とされている。彼の足跡は岩に残されており、滝を作って大洪水を防いだという記録もある。(ラツェル【未開人類の歴史】2巻164-165頁)

「スメ」は、ブラジルの正式の発見よりずっと前に、難破してこの国の沿岸に漂着した多くのヨーロッパ人のことであると考えられる。彼らは、マランハムでも、ペルナンブーコでも、バヒアでも、カボ・フリオでも、セント・ヴィンセントでも、またその他の地域でも、海からあるいは東の方から北と考えられていて、ペガーダスと呼ばれる足跡を岩の上に残し、今でもそのままになっている。(スタデン【ブラジル幽囚記】137頁)

##### 【補注3】次頁可見

ダーゲの島には、デヴィッドが夜どれだけの被害があったのかを見るために乗ったロバの足跡がまだあるという。結局、彼は夜明けに丘の方に引き返していったのであった。(カービー【エストニアの英雄】1895)

バートンの註：イブルドゥルは足を置いた。……。 (バートン【メディナ・メッカ巡礼】2巻45頁)

エルサレムのサクラと呼ばれる聖石の上にガブリエルの手形がある。また、小さな大理石の上にモハメッドの聖なる足跡がある。(バートン、【シリアの生活】2巻88頁)

【資料1-1】

*Manchester Times*, Friday, October 20, 1893

A CHINESE NATURALIST ON THE PROTECTIVE COLOURING OF ANIMALS

It is rather startling to hear that this Darwinian theory respecting the protective colouring, &c., of animals was fully understood and commented on by a Chinese writer about 1000 years ago! Kumagusu Minakata, 15, Blithfield street, Kensington, sends to "Nature" the following very interesting extract from the works of a Chinese author of "great erudition," Twang Ching-Shih, and that, we are told, wrote about A.D.890: - "In general birds and mammals necessarily conceal forms and shadows by their assimilation with various objects. Consequently, a snake's colours is similar to that of the ground; the hare in the imperata grass is unavoidably overlooked, and the hawks' hue agree with that of the trees."

【資料1-2】

*Manchester Times*, Monday, November 2, 1896

SCIENCE NOTES

The correspondence column of *Nature* is a regular repository of contentious manner, of the Chinese puzzles of Kumagusu Minakata and of phenomenal records from different parts of the world. Under the latter category falls the strange case of an x-rays operator, "who states that after being engaged for some months in demonstrating the Rontgen apparatus, he has lost most of his finger-nails and the skin of one hand three times."

【資料1-3】

*Manchester Times*, Friday, December 28, 1900

DEATHLESS MEN

Two Legends - the flying Dutchman and the wandering Jew

The late Duke of Clarence

SOME STRANGE EXPERIENCES

A Japanese scholar has lately show that a strong similarity exists between these European traditional[sic] stories and a Buddhist legend of ancient India. There are naturally many points of difference, but the resemblances are certainly striking. The same scholar, Mr. Kumagusu Minakata, has also show that the Chinese have a legend which in some respects resembles the European stories even more closely than does the Buddhist story of India. It is a strange and fascinating subject, around which has gathered a most extensive literature. - "Globe"

【資料2-1】

22 Carlyle Square

22 March 1895

Dear M. Minakata

You see above my new address, which is quite near my former house.

Dear Admiral Kataoka proposes to come and see me on Sunday, so perhaps you would rather come another day. My house is not yet in order, but I hope it will be clean and fit for distinguished Buddhist prelates as well as great admirals in another week.

I have no doubt that we shall be fully able to display the Kisa if you will be good enough to give it to the British nation. I have a letter for you from Toki, which I sent forward to your address. I have been so busy that I have had no time for anything but putting my house in order.

Your very truly

Charles Read

【資料2-2】

4 XII 97

Dear Mr. Minakata

Here is a piece of the writing of Sir A.W.Franks to make a gaku.

三輪

【資料2-3】

16 Nov 1898

Dear Mr. Minakata

I shall be here tomorrow till 4 o'clock and glad to see you with your friend without 1 o'clock or 3.

Yours truly

Charles Read

Please when you are writing to Japan give my kind regard to the Marquis Tokugawa and his friends whom I met here. I have heard nothing of them since they left England.

【資料2-4】

British Museum

16 May 1898

My dear Gomme

Will you allow me to introduce to you Mr. K. Minakata, a very learned Japanese Buddhist priest who is a student of Herbert Spencer and of his studies. He has some questions to put to you & would be glad of your help. He particularly wanted me to give him an introduction to you to the purpose of consulting you on the disposal of his manuscript on his leaving England in December next.

Your very truly

Charles Read

【資料2-5】

16 April 1899

Dear Mr. Minakata

I safely received the present of a roll of silk from Marquis Tokugawa and have written to thank him for the gift. It came from the Bank to me.

Where have you been lately? I think you must be spending all your time with geisha. I counted to ask you the other day whether Tanzan ever signing his name like this? |光單山| He usually writes 丹山.

Yours truly

Charles Read

【資料3-1】

Anthropology at the British Association; Sixty-Eighth Meeting; Bristol, 1898, J. L. Myres  
FOLK-LORE AND COMPARATIVE MYTHOLOGY

On the Folk-lore of Guernsey. By the late Mrs. Murray Aynsley

On the Folk-lore of the Outer Hebrides. By Miss A. Goodrich-Freer

Myths and Fancies of Insect Life. By L.Clement Southam

Some Roman Symbolic Hands. By F.T.Elworthy

Note on the Origin of Stone worship. By Professor H.A. Miers, M.A., F.R.S.

On Tabu in Japan in Ancient, Mediaeval, and Modern Times. By K. Minakata

【資料3-2】

On Tabu in Japan in Ancient, Mediaeval, and Modern Times. By K. Minakata

Describes the tabu observances of Japan in three successive periods.

In the first, from the earliest times to 710 A.D., an indigenous and elaborate system of tabu prevailed respecting the person and name of the Emperor, the nobles, priests, temples, certain trees and animals, and unclean objects. The system was extended to the nether land of darkness, wherein this world's vegetation was tabu to those souls who would partake of food cooked on an infernal hearth.

In the second period from 710 A.D. to the Restoration of 1867 A.D., this indigenous system was largely overlaid and, on the whole, relaxed by beliefs introduced together with the Chinese and Indian culture. Numerous fresh restrictions, together with the Buddhist theory of universal metempsychosis, came into vogue.

In the third period, from 1867 A.D. onward, this heterogeneous and complicated tabu system was officially abolished; but a number of primitive and Shintoist tabus were at the same time restored, to the death of close relatives.

The author ascribes in great part to the tabu system the loyalty, probity, and and historic scenes evinced by their art and literature.

p.187

#### 【資料4-1】

Among the Chibchas, however, Chinmizapagua, the messenger of God, comes from the east. To him were ascribed wise laws, but above all, the art of spinning and weaving. His footprint was shown in a rock, and he was recorded to have averted a great flood by making a waterfall.

Ratzel, vol.II, p.164-165

Sumé whom he will assume to be the type of many shipwrecked Europeans that were cast upon the Brazilian coast long before the official discovery of the country, appeared coming from the sea or eastward, at Maranham, at Pernambuco, at Bahia, at Cabo Frio, at S.Vincent, and other parts, where his pegadas or foot-prints in the rock were and still shown.

Hans Staden, *Captivity in Brazil*, 1874, p.137

次頁可見

In the island of Dago, the marks of the hoofs of a mare on which the David rode to see in the night time what damage be inflicted, are still to be seen where he heard the cock crow & turned back to hill

Kirby, *The Hero of Estonia*

Burton's note,△ Ibuldul, ...placed its hoofs

The Masjid Benn Zafar [at Al-Madinah] & also called Masjid al-Baghlah of the  
Burton's *Pilgrimage into Al-medinah & Mecca*, *The York Library*, vol.II, p.45, 1906

Jerusalem. The Kabbet is Sakhrah (... of the Rock) Rockノ上ニGabriel hand-markアリ & there is an apocryphal footprint of Mohammed on a bit of marble. Burton, *the Inner Life of Syria*, vol.2, p.88, 1875

#### 注

- 1) 邸内調査の結果は「南方熊楠邸蔵書目録」「南方熊楠邸資料目録」として公刊されている。その他研究動向については松居竜五「南方熊楠，伝説から真実へ」（『ユリイカ』2008年1月号59-63頁）を参照。
- 2) 「南方熊楠記念館蔵品目録」，南方熊楠記念館，1997年
- 3) 横山・中西・松居「ランシング・アナーバー時代の南方熊楠」（『熊楠研究』第5号106-135頁），松居「サンフランシスコにおける南方熊楠」（『熊楠研究』第6号296-306頁），松居「南方熊楠宛スウィングル書簡について」（『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第7号149-156頁），松居「ジャクソンヴィルにおける南方熊楠」（『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第11号210-230頁）などを参照のこと。
- 4) 長谷川興造・武内善信「南方熊楠 珍事評論」，平凡社，1995年，215-222頁「熊楠・常楠往復書簡」を参照。
- 5) 牧田・松居「ロンドン南方熊楠関連新資料」（『熊楠研究』第5号）
- 6) 「南方熊楠 珍事評論」276頁
- 7) 『日本長期統計総覧』第3巻104-5頁，1991年，による。
- 8) たとえば1892年9月14日の熊楠日記には「米貨二十弗を英貨四磅ニシルリングに換」とあり，これは当時のドル・円レート（100円=65.5~75ドル）から見てほぼ1円=3シルリング。同12月17日には，「常楠よ

り書留着。金百五十円（二十一磅八志二片）正金銀行証封入」とあり、これは1円=2.856シリング。

- 9) 『南方熊楠全集』, 平凡社, 1970-75年, 7巻13頁
- 10) 『南方熊楠全集』, 1970-75年, 7巻16頁
- 11) 『南方熊楠英文論考〔ネイチャー〕誌篇』, 2005年, 263-270頁
- 12) 安田忠典「南方熊楠と熊野古道——世界遺産百年前」(『南方熊楠の森』26-38頁)を参照。
- 13) この経緯に関しては、松居・小山・牧田『達人たちの大英博物館』(講談社選書メチエ, 1997年)中の小山騰による「大詐欺師・プリンス片岡」(155-171頁)を参照。
- 14) 長谷川興造・武内善信『南方熊楠 珍事評論』, 1995年, 175-176頁
- 15) 『南方熊楠全集』第7巻577-578頁